

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520375

研究課題名(和文)フロベールおよび同時代作家における白昼夢の形象とその歴史的文脈

研究課題名(英文) Figures of day dream and its historical context in Flaubert and his contemporary writers

研究代表者

橋本 知子 (Hashimoto, Tomoko)

立命館大学・経営学部・非常勤講師

研究者番号：60625466

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：ギュスターヴ・フロベール(1821-1880)をはじめとする19世紀フランス文学において、白昼夢およびその変形としての諸現象(幻覚、錯覚、幻影、幻想など)といった、無意識の表出というテーマがどのように描かれているかを考察する。また当時の医学が文学に与えた影響を考慮した上で、フロイト前夜の文学と医学との関係性について、文学作品が医学言説をどのように受容したかを文献学的に検討する。

研究成果の概要(英文)：This research examines how Gustave Flaubert (1821-1880) and other French writers of the mid-nineteenth century described daydream and similar psychological phenomena (such as hallucinations, illusions, fantasies and mirages) that are considered eruptions of the unconscious mind. To analyse these elements as they appear in literature, the research takes into consideration the influence of contemporary medical discourse, mostly that of the physiological domaine, and doing so, tries to reveal the relationship between literature and science in the "age of realism".

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学 19世紀

1. 研究開始当初の背景

学術的背景をふりかえると、文学と医学の関係は 1990 年代以来盛んな研究テーマであり、特に、1830 年代からフランス文学に頻出するようになった「幻覚」が注目されている。リアリズム文学における医学の影響を「幻覚」の主題から論じたものとしては、ジャン＝ルイ・カバネス、ジゼール・セジャンジュール、パオロ・トルトネーズ、ジュリエット・アズレ、サンドラ・ヤンセン、ジャン＝フランソワ・シュヴリエなどの著作や論文が挙げられる。科学が規範であった 19 世紀フランスにおいて、文学は科学の言説をいかにして内在化し、いかにして病を描いてきたかだろうか。こうした問題は、同時代の科学史や思想史の中に文学作品をひとつの布置として捉えようとする試みである。

以上のような先行研究をふまえて本研究では、対象をリアリズムと呼ばれるギュスターヴ・フロベール(1821-1880)と、エミール・ゾラ(1840-1902)ギ・ド・モーパッサン(1850-1893)といった自然主義の作家に限定して分析を行う。

本研究は、博士論文の延長線上にあるものと位置づけられる。パリ第八大学に提出した博士論文では「フロベールにおける幻覚」という題の下、幻覚という主題の時代背景、19 世紀医学との関係、フロベールにおけることばの用法と同時代作家(主にロマン主義作品)との比較といった角度から、同時代の知とのかかわりの中で幻覚を考察した。またどのような段階をへて物語世界に組み込まれるようになったかをたどる草稿研究、フロベールの全作品における物語的機能とその効果をみるテーマ批評も試みた。この博士論文で捉えきれなかった点、十分に検討できなかった点を再度試みるということが、研究開始当初の背景となっている。つまり、同時代医学との文献学的比較をさらに先鋭化すること、また、比較対象となる同時代文学を、同じく科学の時代の作家であるゾラやモーパッサンに設定することで、ひとつのカテゴリーに収容されがちな双方の作家たちの、その連続性をみるのではなくむしろ、その差異をみてゆくこと、である。

こうしたプロブレマティークを元に、科学主義の影響下にある 19 世紀、フロイト前夜のフランスで、白昼夢およびその変形としての諸現象(幻覚、錯覚、幻影、幻想など)といった無意識の表出が、どのように理解され、また文学作品の中でどのように主題化されているかを明確にする。と同時に当時の医学理論に鑑みることで、文学的言説がどのように科学的言説を受容し、かつまたそこからの差異化を図ったかを文献学的に検証し、白昼夢という「不可視の可視化」を通して 19 世紀フランスにおける文学と科学とが構築した関係性について考察する。

2. 研究の目的

本研究では研究対象を「白昼夢(rêve diurne)」およびその変形としての諸事象とすることで、「幻覚(hallucination)」のみならず、「錯覚(illusion)」「幻影(vision)」「幻想(fantastique)」といった隣接する他の事象をも包括し、無意識の表象を多角的に考察することを目的としている。19 世紀は実証主義の時代であり、夢や想像の領域に属するとされる白昼夢は一見したところ科学の対極にあるものに思われるが、奇しくも、実証主義の影響下にあるリアリズム文学および自然主義文学において、白昼夢はくりかえし描かれている。実際、作家たちは同時代の科学を射程に入れつつも、虚構という世界を構築するにあたって、科学の厳密性に必ずしもとらわれることなく、日常にひそむ無意識の諸形態を作品の中で自由に描いた。こうした側面は、文学作品を当時の歴史的思想的背景のみから捉えようとする還元主義だけでは説明しきれないものである。本研究では、このように文学作品を科学の発展と変遷の軌跡に照らしあわせて分析してゆくと同時に、「リアリズム文学は現実を克明に描く」といった文学史上の定説を再検討することで、これらの文学潮流が、実のところ現実だけでなく夢や想像の領域をも鮮明に描き出していることを指摘し、文学という言語芸術が夢と現実の「間(あわい)」を描く際の、その表現の独自性と多様性とを明らかにする。

3. 研究の方法

19 世紀フランスにおける文学と医学との関係性を分析するにあたり、白昼夢とその変形としての諸現象が頻出する作品を選別するために、まずはキーワードを限定することが研究方法の第一条件となる。

具体的には、「白昼夢(rêve diurne)」を筆頭に、「錯覚(illusion)」「幻影(vision)」「幻想(fantastique)」といったキーワード、およびそれに似通った事象として「夢(rêve)」「夢想(rêverie)」「想像(imagination)」といった語が挙げられ、それ以外にも、「想起(souvenir)」「回想(mémoire)」といった語も分析の対象となる。なぜなら、フロベール作品において幻覚は過去の想起と等価なものとして表され、作者自身も書簡の中でそのように語っているからである。幻覚を医学的に定義すると、「そこに存在しない物体や人が知覚されること」となるが、フロベール作品における幻覚とは、未知の事物の到来ではなく、すでに一度見たことのある事物を目のあたりにすることであり、よって幻覚をおぼえる者はそこに過去をノスタルジーとして想起している。幻覚を過去の想起と捉えるこうしたフロベールの観点はイポリット・テーヌの知覚論に近い。両者の類似性は医学的にみて重要であるといえるだろう。

語彙検索が重要となってくるのは、ことばの使用頻度が 19 世紀フランスの医学史と連

動しているからに他ならない。「幻覚 (hallucination)」の語が使用される作品数は、1830 年を境にして急激に増加する。これは当時の医学において幻覚が議論の中心となっていたという事実を反映している。幻覚は古代ヒポクラテスの時代から知られた事象であったが、中世には宗教的法悦と混同され、また文学作品においても「幻覚 (hallucination)」の語が使用される例はほとんど皆無であった。しかし 19 世紀に入って、主に 1830 年代と 1850 年代に、医学の分野において幻覚がふたたび注目されるようになり、幻覚にかんする医学書や論文が数多く出版されるようになる。1830 年以降の文学作品で「幻覚 (hallucination)」の語の使用頻度が上がるのはこうした時代背景のもとにある。また、ホアン・リゴリがその著書『精神錯乱を読む』(Lire le délire、Fayard 社刊、2001 年)で明らかにしたように、バルザックやノディエといった医学を意識していた作家たちが幻覚を積極的に描くようになっていたという事実も指摘できる。このように「幻覚 (hallucination)」の語が人口に膾炙すると同時に、フランス文学においても幻覚現象が大いに描かれるようになったといえる。

こうした語彙検索は、文学作品に特化したオンライン上りサーチエンジンの普及によって、現在は比較的容易にこなすことのできる作業であるが、対して実際の文学作品の読解という過程は、様々な年代の様々な作品が対象となるため、テキストと対峙するためにはある程度の時間が必要となってくる。よって白昼夢が主題となる文学作品を限定し、そしてそれを精読することに、予想以上の時間を費やすことになった。

具体的にいうと、フロベールの作品については読解および白昼夢にかかわる場面の分析はすでに終わっていたが、それに対し他の作家については、白昼夢の表れる小説を読みこむことに初年度は終始した。また成果論文で直接引用する作品以外の小説もあわせて読むことで、その作家の描く白昼夢の特徴を包括的に把握するように努めた。

他の作家の先行研究を概観し、本研究とかわり深いと思われる著作や論文を読むことにもまた時間を費やした。19 世紀リアリズムおよび自然主義とひとくくりにしても、小説作品のみならずその研究アプローチの方法も作家ごとに異なる。そうした相違は複数作家を分析対象として扱う際に配慮しなければならない点であった。

文学との比較の対象とする医学的言説についてであるが、科学主義の時代 19 世紀において、その前半と後半では主流となる学派が異なっている。そこでリアリズム文学や自然主義文学の作家たちに直接的な影響を与えているとされる生理学に焦点をしばり、1850 年代の医学雑誌論文、および、19 世紀後半によく読まれていたイポリット・テーヌの著書を取り上げ、そこで論じられている幻

覚と、文学作品に表されている幻覚との相違点を重点的に分析した。

4. 研究成果

テーヌの著作『知性論』(1870)と、フロベール、ゾラ、モーパッサンとの関係は注目に値する。テーヌは 19 世紀に影響力のあった思想家であり、「人種・環境・時代」というその決定論は批判されるものであるが、フロベール、ゾラ、モーパッサンが当時支配的だったテーヌの理論を規範としていたのは事実である。作風を異にする三人の作家はみな、テーヌの著作に親しみ、テーヌが生理学的見地から論じた白昼夢の科学的説明に通じていた。しかし白昼夢の描かれ方は三者三様である。同じひとつの医学的言説とはいえず、それが文学的言説へと変容するとき、どのような変容の差異があるのか。三者のテキストが呈しているそうした差異こそが、作家の文体的特徴といえるのではないか。こうしたテキスト的差異を分析することで、文学作品が科学的言説をそれぞれ固有の方法で受容している点を明らかにし、文彩(フィギュール)でなくては表しえない白昼夢について、また文学独自の方法について考察した。

以上を論文にまとめるにあたっては次の二点に留意した。まず、テーヌの『知性論』はすでによく論じられている著作であるが、その中の知覚のメカニズムを生理学的見地から論じた章とリアリズム文学で描かれる白昼夢との親近性についてはまだ詳しい研究がなされていない。よって、テーヌ理論の確認と紹介とをかねて、その説明に行を費やした。また本研究の中心となるテキスト分析では、直喩、隠喩、換喩、あるいはそうした比喩の不在といった、文彩の(不)在に注目することで、リアリズム文学における白昼夢のモダリテについての一例を示すことを試みた。

今後の展望としては、フロベールにおける白昼夢の問題についての分析を継続する予定であり、比較の対象として、他の同時代作家をも射程に入れることを考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

橋本知子、「La physiologie des images mentales, Taine et Flaubert, Zola, Maupassant」, 「19-20 世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係」, 第四回シンポジウム、2013 年 7 月 13 日、南山大学(愛知県)

〔図書〕(計 1 件)

橋本知子「イメージの生理学 テーヌとフロベール、ゾラ、モーパッサン」, 真野倫平編

著、行路社、『19-20 世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係』所収、2015 年、pp. 321-364。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

橋本 知子 (Hashimoto Tomoko)
立命館大学・経営学部・非常勤講師

研究者番号：60625466